# 水球競技における新しい組織の創設
## ～ワセダ水球クラブの発足に向けて～

スポーツクラブマネジメントコース
5008A307-6　大渕泰宏　　研究指導教員：　間野義之准教授

### 1．緒言

足元の世界同時不況は、経済環境の悪化による失業者の増加を招き、また、我が国の特徴的な問題である急速な少子高齢化の進展は、人口構成のバランスに変化を与え、生活スタイルの変化や今まで積み上げられてきたあらゆる社会基盤に影響を及ぼしてきている。

そのような状況下、我が国では“総合型地域スポーツクラブ”“スポーツボランティア”“スポーツマネジメント”という言葉が定着しつつあり、新たなスポーツシーンの創造が進められてきている。

それらの言葉は、スポーツは選手以外の他者の支えなくしては成り立たない現実を表面化させ、次代のスポーツの在り方に的確なメッセージを発信しているものであると考える。

今までは暗黙知の中で処理され、言わば日陰になっていた部分や、“やりたい人がやればいい”とか“きっと誰かがやってくれる”といった他者依存の中で整理されていた面について、今後は確かな意思を持って取り組む事が非常に重要になってくるのではないだろうか。

逆に、そうしていかなければ、人々の様々な成長や生活に大きな影響を与え続けてきたスポーツを、今後支えていくべき基幹部分である、『ひと』や『しくみ』が機能停止に陥ってしまうのではないかとさえ危惧しており、それら新しいスポーツシーンの創出の最大の担い手のひとりとなっていくべき立場にいるのが、大学スポーツ界ではないかと考えている。

### 2．水球競技の歴史と日本への伝播

我が国においては英国式の水球が伝わる以前より、「打球戯」や「西瓜取り」として水中競技が行われていた。1898 年（明治 31 年）に嘉納治五郎によって結成された『造士会』においても水術の練習に力が入れられており、紅白に分けられたチームが水面上に浮かべられた複数の小玉を船上に設置されたゴール（球門）に投入するという「打球戯」は水術訓練の一環として盛んに取り入れられてきた。

### 3．日本水球界の現状と課題

日本がオリンピックという国際舞台に立てない理由としては、

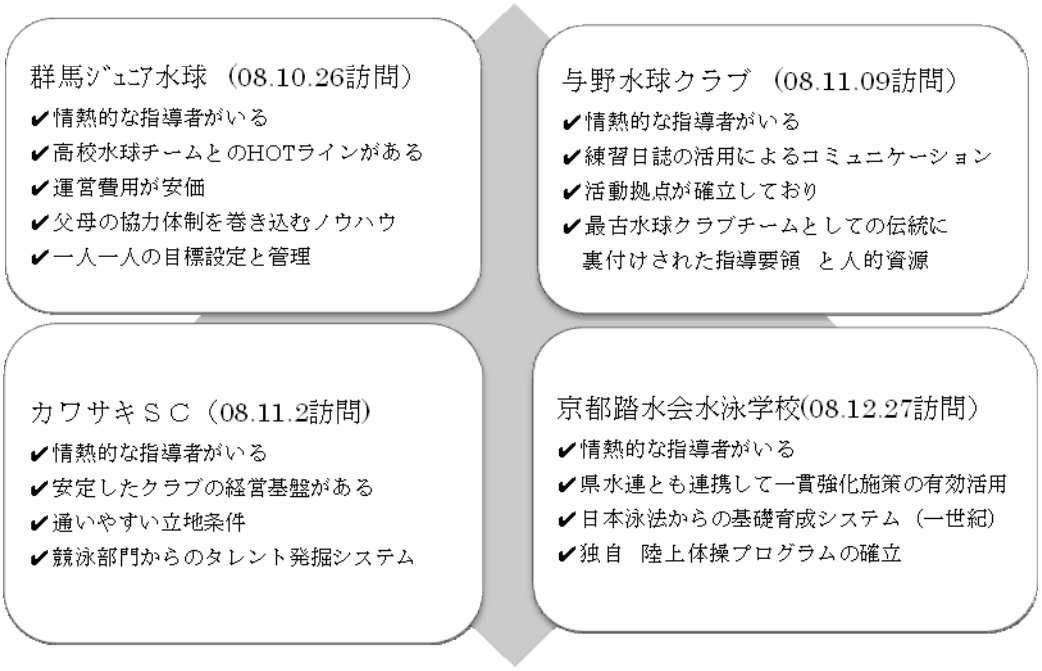
1）外国人選手との体格差
2）国際経験そのものの不足
3）社会人の競技環境が整備されていない等　様々な理由が考えられる。

日本水泳連盟水球委員会は、長期的な視点に立った選手育成プログラムの開発及び環境の整備が立ち遅れていたとの点を挙げており、それらに対する遅れを挽回する為に2003年に『日本水球競技の長期一貫指導型競技者育成プログラム（以下「水球一貫指導プログラム」）』を開発した。

### 4．水球クラブの活動状況と先行事業の取り組み

#### 4．1既存水球クラブの現状研究

国内における小・中学生カテゴリーにおいて継続的に優秀な競技成績を残している下記4チームを訪問し、インタビュー調査を実施した。




### 4．2 先行事業の実施

2008年7月にて先行事業として小学生を対象に水球スクールを開講。

JOCの提唱する一貫指導システムや水泳連盟の開発した水球一貫指導プログラムの一端を現場にて疑似体験すると共に、我々の持つ能力（指導力・プログラム遂行力）や実際の小学生の反応、更には選手や運営スタッフに与える影響（人間形成プログラムとしての位置付け）について確認した。

## 5. ミッション・ビジョン・運営モデル

水球競技における一貫強化プログラムの実現は日本水球界の普及・発展に不可欠な取り組みであり、それらに寄与していく事は、競技界の TOP チームの一員である当部の使命であると考え、実現の為の施策として今までに水球競技の現場においては実際に存在していなかった、大学クラブ『ワセダ水球クラブ』を立ち上げ、一貫指導・強化体制を確立していきたいと考える。

**【ミッション】**

水球を通じてクラブに関わる全ての人達の笑顔と元気（と未来）を創造していく

『我々は、元気ある明るいワセダ水球コミュニィティーを構築していく為に、クラブに関わるあらゆる層の人々に、クラブを中心として“水球をみる・する・ささえる”場面を提供し、それらを通じてそこへ集う皆の元気（と未来）を創造していく事を使命とする』

**【ビジョン】**

元気あるワセダ水球クラブコミュニティーの構築

**（戦略）**

① 継続しうるマネジメント体制の構築

② 水球エリートの育成

③ 組織運営におけるソリューション意識の醸成

**（タスク）**

① 水球を軸にした魅力的な運営プログラムの創造

② 人間形成プログラムの作成と PDCA サイクル実施

（OUTPUT）

① 日本水球界への貢献（普及・強化への参画・水球ファンの増加）

② 社会貢献の出来る水球人材の輩出量増加

③ 基軸となる水球ジュニアスクールの確立

## 6. ワセダ水球クラブｼﾞｭﾆｱｽｸｰﾙ事業の展開

本項では、ワセダ水球クラブの基幹事業である、ジュニアスクールの事業計画について記述していく。

当クラブのビジョンとして掲げた、日本水球の普及発展に寄与していく為、また先行事業にて確認した、社会に貢献する力を持った水球人材の育成の観点から、本事業の重要性を捉え、具体的実行計画を探っていく。

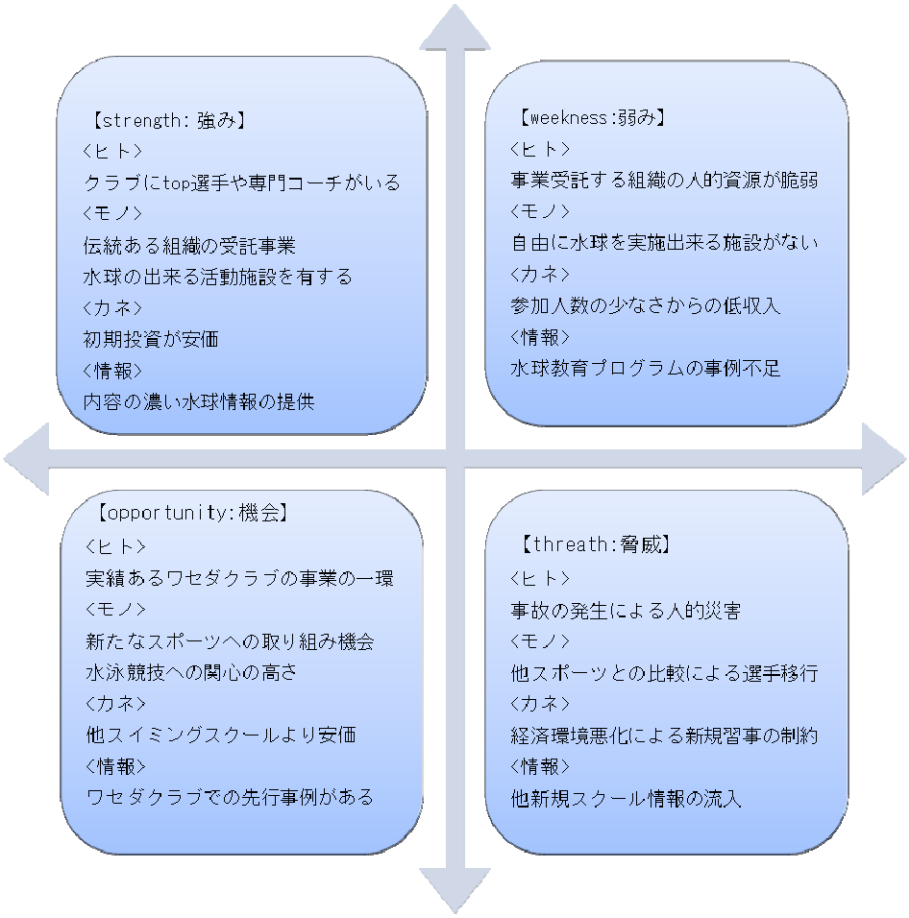



図12.スクール事業における SWOT 分析

## 7. 施設

施設名： 上井草スポーツセンター

所在地： 杉並区上井草3－34－1

施　設： プール（25m×6コース、水深1．2～1．35m）

本施設は、2009 年度からは㈱東京アスレチッククラブと東京フットボールクラブ㈱のコンソーシアムが受託し、ワセダクラブが協力団体となり支えていく予定であり、ワセダクラブの水泳Divの活動場所として積極的に利用を検討。

## 8. リスクマネジメント

ジュニアスクール事業における最大のリスクは、開講中に発生する不慮あるいは人的事故の発生である。

外的要因・内的要因の両側面からそれらに対するマネジメント体制を検証する。